



### ふるさととは荒れて

俳人・山頭火はずいぶんと知られるようになってきたが、山口県防府市の出身で、一八八二年(明治一五年)生まれ。一九四〇年(昭和一五年)に五八歳で没しているが、漂泊の俳人として九州、四国、そして本州は平泉まで歩いている。五七五の定型ではなく、自由律で俳句を詠んだ▼山頭火を顕彰して、毎年、山頭火にゆかりのある地で「山頭火フォーラム」が開かれてきた。今年は第二五回となるが、山頭火の生誕の地・防府市で一二月九日、開催。先に「山頭火ふるさと館」がオープンしたのを記念して催されたものである▼今回フォーラムのメインはシンポジウム「山頭火、<sup>長</sup>みせず、<sup>い</sup>中也の故郷」だ。金子みすゞ(一九〇三―一三〇年)は<sup>長門</sup>山口市出身、中原中也(一九〇七―一三七年)は<sup>長門</sup>長門市の出身。これに周南市出身のまど・みちお(一九〇九―二〇一四年)も加えることができよう。何故、山口県はこれほど多くの詩人を輩出したのか、これが一つのテーマとなり、あわせてテーマとなったのが各々に共通するふるさとに対する強い思いであった▼山頭火がふるさとを詠んだ中からいくつか。海よ海よふるさとの海の青さよ／ふるさとの河原月草咲き乱れ／ふるさとの萩こぼれるを観て通る／ふるさとの花の匂へば匂ふとて▼今回、下関から山陽本線に乗って防府まで、ゆつくりと車窓を眺めながら移動したが、沿線には耕作放棄地が続く。山口県はまた有力な政治家を輩出してきただころでもあるが、農政の効果が及んでいないこの現実を安倍首相等はどう感じているのだろうか。もはや昔のふるさとではない。

(土着菌)